# 第24回 全日本大学選手権大会（男・女）

平成元年8月26日(土)～29日(火)

千葉市／県総合運動場・みつわ台野球場他

## 男子

## 日体大4年連続19回目の優勝

日ソ協記録委員　上坂　衛

第24回大学選手権大会は「緑と水辺の都市」・京葉工業地帯の中心で、首都圏が広まる中で急激な発展を続ける千葉市の、県総合運動場・体育館において、25日12時30分より日ソ協より久保田審判長・山根副審判長・長縄記録長（女子担当）、関東ブロックより派遣審判・記録員を迎えて、千葉県平田審判長・飯田記録長の元で綿密な打ち合わせを行った。

2時からの監督・主将会議では、松田大学連盟会長・宍倉日ソ協副会長より挨拶があり、地元の要職の方々より丁寧な歓迎のお言葉をいただきながら明日からの大会に若い選手一同は、思いを新たにしていた。

4時から総合運動場内の硬式野球場で開会式があり、全国の予選を勝ち抜いてきた男子28チーム・女子20チームの堂々の入場行進に千葉県警音楽隊の見事な行進曲が華を添え、大谷競技委員長の開会宣言で式が始まり、前年度優勝の男子「日本体育大学」・女子「園田学園女子大学」の優勝旗・優勝杯返還にも「今年も連続優勝しよう」の意気込みが感じられた。

翌大会1日目は、台風17号の前線が近くにあり小雨の中で行われたが、選手は元気にプレイをし、男子は3会場で12試合を消化、「関西」・「山梨学院」・「福岡」・「京都産業」・「国士舘」らの各12大学が勝ち残った。特に目立った試合は、「愛知」対「同志社」戦で、延長12回の表、無死一・二塁を併殺で切り抜けた「同志社」がその裏、一死一・三塁から中越え安打で競り勝ち、2時間32分の熱戦終止符を打った。

大会2日目はもろに台風17号の広大な雨域に入り大会役員の頭を痛めた。残り15試合を考えて各球場で1試合目を雨中の強行となったが、いかんせん雨には勝てず、大会新記録や珍プレイが続出で2試合目より中止に至った。特に気の毒な試合は「山梨学院」対「龍谷」で、1イニングで17打席・12失点・5失策・67投球・2時間34分と「龍谷」の林投手には大変な試合であった。

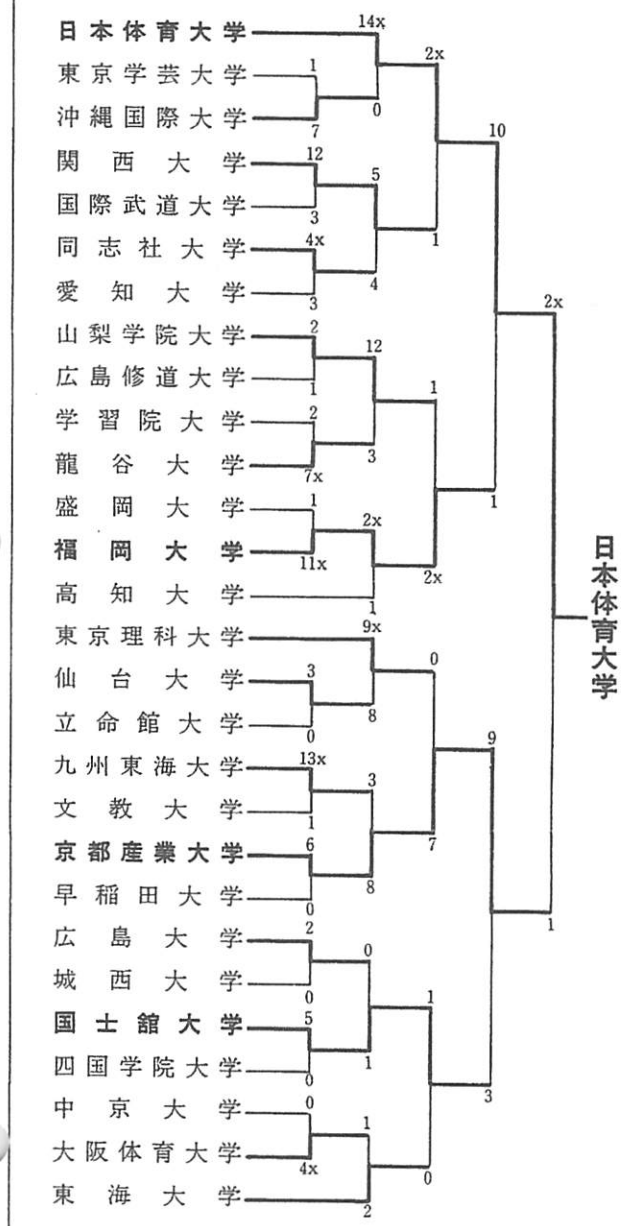
3日目は、台風一過、風はかなり強く吹いてはいるが抜けるような青空の下で9試合が行われ、さすが準々決勝戦になると「日体」対「関西」、「山梨学院」対「福岡」、「国士舘」対「東海」と1点差の好ゲームが展開された。

大会予備日を使っての4日目、準決勝戦こそ「日体」・「京都産業」ともに大差で勝ち上がったものの、決勝戦は「京都産業」が2回の表、先頭打者4番の中田が中越えの本塁打で先行したが、「日体」が4回の裏、馬場の左中間二塁打を4番谷田が中前適時打で同点にし、7回裏、二死一・二塁、代打竹崎が中前に弾き返し、サヨナラ勝ちして4年連続19回目の優勝を飾った。

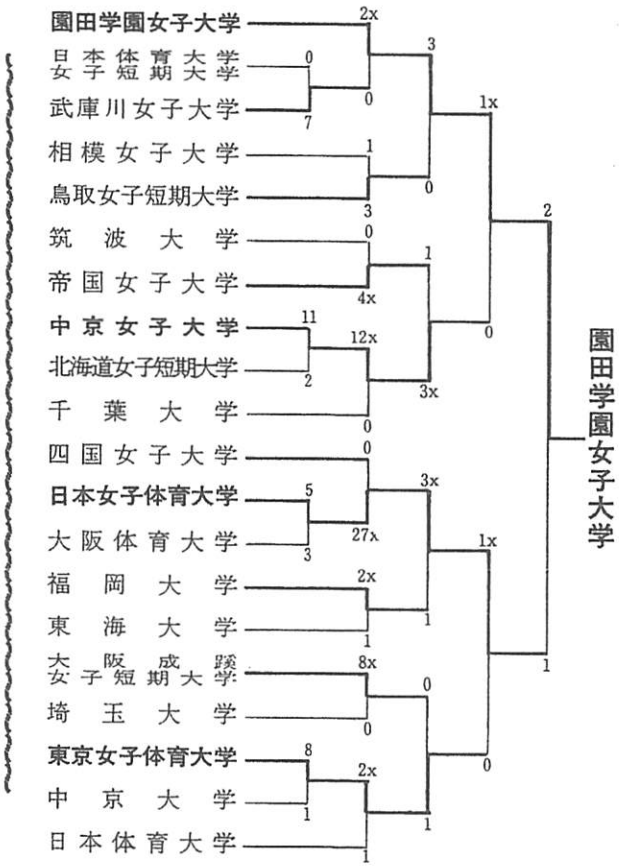
### ◆印象に残った選手について

投手を3枚持っている「日体」は別として、「京都産業」の滝本投手は6－0、8－3、7－0、9－3と準決勝まで味方の打線にもより、前半の内に大量点をもらう楽な試合だったが、連続5試合完投の34回3分の2を自責点5で1・01の防御率、三振28は立派な成績だった。「国士舘」の勝田投手も3試合連続無失点だったが、「京都産業」の集中攻撃にあい防御率1・36と落とした。また「日体」の大村投手は三振を奪う球威はあるが、一発のある打者に打たれる場面も見られた。打者では、「日体」の細川選手の14打数8安打、「福岡」島野選手の11打数6安打、「日体」浅見選手の14打数7安打と5割以上が3人と、4割以上がベストテンを占めるほどの高打率者がひしめいた。1試合中2本塁打の「福岡」平山、「仙台」阿部や、「福岡」久保の大会2本塁打などがあり、合計23本の本塁打は見事で、「日体」と「福岡」の有住兄弟の本塁打は見せ場を作ってくれた。

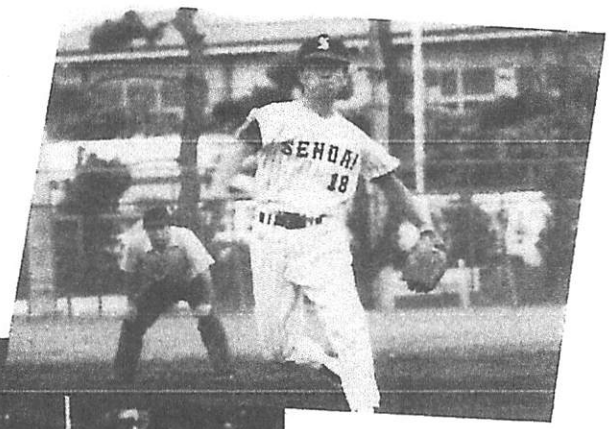
## 男子

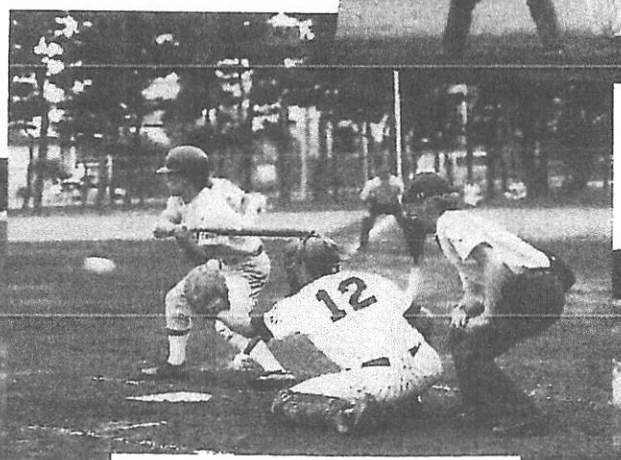



## 女子




## 大会風景





パワーさく裂！